中１ギャップ克服と小中連携・一貫教育の研究

学校力開発コース（12220919）　伊　藤　潤　一

The purpose of this study is twofold. The first is to clarify the characteristics of the gap between elementary and junior high schools. The second is to show the junior high school transition program based on the nine-year school system. As a result, this study could propose the program in order to solve the learning gap between elementary and junior high schools.

［キーワード］　中１ギャップ，小中連携，小中一貫，小中連携プログラム

１　問題の所在と研究

(1)　問題の所在及び研究の背景

「中１ギャップ」とは，「小学校から中学校に大きく環境が変化する過程で，多くの児童生徒が生活環境，授業の形式や内容，学習の方法にギャップを感じ，不登校，いじめ，学習意欲の低下などの不適応現象を引き起こしている状況」（赤鹿，2009）のことである。平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省，2012）によると，不登校の児童生徒数は小学６年生で7,522名であるのに対し，中学１年生では21,895名と約３倍近く増加する。

筆者は，これまで中学校教員として，中１ギャップの状態に陥った生徒と毎年のように関わってきた。小学校と中学校の間の段差を特に問題とせずに乗り越える生徒も多い。だが，段差に不安や戸惑いを持つと学校への不適応を引き起こし，中１ギャップの状態に陥る生徒が現れる。中１ギャップは小・中学校両方にまたがった問題である。

一方，平成23年度に文部科学省は「小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理」をまとめている。この報告書は，小中連携を「小中学校が互いに情報交換，交流することを通じ，小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育」，小中一貫を「小中連携のうち，小中学校が９年間を通じた教育課程を編成し，それに基づき行う系統的な教育」と整理している。同報告書は，中１ギャップに陥る原因の一つとして，「小学校から中学校に進学する際の接続が円滑なものになっていないこと」を指摘する。例えば，学習面では，「授業形態の違いや学習上の課題が小中で共有されていないこと」である。生徒指導面では，「生徒指導の方法の違いや生徒指導上の課題が小中で共有がされていないこと」である。小中連携は，中１ギャップなどの学校間の接続に関連する課題解決の観点に加え，小中９年間を通して生きる力を系統的に育んでいく観点から重要となっている。

しかし，現在，小中連携は多くの課題に直面している。例えば，小中連携の活動を行うための時間割の編成や指導計画の作成，小中教員間での打ち合わせ時間の確保が困難であること，連携相手についての理解が不足していることである。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は２つである。第一に，山形県内の２つの中学校区を取り上げて，中１ギャップの実態や小中間の連携において何が課題となっているのかを明らかにすることである。その方法として，２つの中学校区の中学１年生と中学校教員（１つの中学校区については小中学校の教員）を対象として行ったアンケートを実施した。第二に，中１ギャップを克服し，小中間の連携の課題を解決するためにどのようなプログラムが有効なのかを明らかにすることである。その方法として，筆者の勤務するＫ中学校区にて，アンケート結果の分析を踏まえて実践した小中連携プログラムを実践し，その効果を検証した。

２　先行研究の検討

(1) 中１ギャップの実態把握

宮崎県西都市立妻南小学校(2007)は，中１ギャップにかかわる児童生徒や教員の意識を把握するためのアンケートを2007年に実施している。児童生徒の調査結果から，中学校入学前に不安だったこととして，「成績」「授業」「宿題」の割合が高く，

主に学習面に強い不安を持っていたことが明らかになった。小中教員の調査結果からは,「生徒指導面を基盤とした教育」が小中連携で最も重視すべき観点と考えていることが明らかになった。

京都市総合教育センター(2004)は，小中連携教育についての実態を把握するため，京都市内の全小中学校教員を対象としたアンケートを 2004 年に実施している。調査結果から，小中教員とも現勤務校の小中連携は充実していないと感じていることが明らかになった。その理由として,「話し合いが十分になされていない。」「相手校種の取り組みを理解していない。」などが挙げられている。

(2) 小中連携プログラムの実践

ベネッセ教育総合センター(2011)によれば，栃木県宇都宮市の一条地域学校園(一条中学校区)は,中1ギャップを軽減し，小中の円滑な接続を目的とした小中一貫教育を2010年度から進めている。例えば，小中の乗り入れ授業や授業研への相互参加，中学生による小学生へのあいさつ運動などである。小中連携の組織として,「学習」「生活」「健康体力」「交流連携」の4部会を設け，年間行事に月1回の「小中一貫の日」を組み込んで小中の先生方が無理なく話し合いの時間を作っていることも特徴的である。これらの結果，小中の学習のつながりを意識した学習指導ができるようになったことや小学校児童が中学校への慣れから不安が和らぎ，中学校生活への期待が高まったこと，中学1 年生の不登校の数が減り小中教員の連携への意識が向上したことなどが報告されている。

佐賀県伊万里市の南波多中学校区では，小中連携を通して子どもたちの生活・学習習慣を整え，学力向上につなげようと，子どもが1日をどのように過ごすかを自分で決める「生活スケジュール表」の作成を行っている。その中で，小中連携に保護者を巻き込み，保護者に連携の取り組みのねらいや子どもの様子を伝えるパンフレット「連携読本」を共同で作成・配布していることが特徴的である。その成果として，小中連携に対する保護者の理解も深まり，家庭での声がけが増えたことで規則正しい生活ができる子どもが多くなったことやほとんどの小学生が早期に中学校生活になじむようになったことなどが報告されている。

栃木県宇都宮市の一条地域学校園や佐賀県伊里市の南波多中学校区の実践は，小中の円滑な接続を目指した成果として中1ギャップに陥る子どもが減少したことや保護者を巻き込んだ連携の有効性を明らかにしている点では意義あるものといえる。ただ，両学校区の実践は，子どもたちの実態把握からの分析がなく，子どもの声や地域性を十分に生かした小中連携の実践になっていない。

(3) 9年間の系統性を意識した小中連携・一貫教育の実践や組織作り

山形県最上郡大蔵小中学校(2011)は，平成 21 年度に村内の学校が県内で初めて1小1中に統合されたことを機会に,「自立した学び手を義務教育9 年間で育てる」ことを目的とした組織的な小中連携の実践を行ってきた。例えば，大蔵村教育委員会が主催する「大蔵小中連携会議」の下,「学びづくり研究会」「育ちづくり研究会」の2部会構成を組織したことである。「育ちづくり研究会」では,生きる力を育むための基礎基本となる「ソーシャルスキル」「生活リズム」「キャリア交流」の3つの項目に着目した指導を行っている。その成果として,「学びづくり部会」では小中共通の授業づくりの視点で授業を語り合うことにより小中教員の授業改善が進んだこと,「子どもの育ち研究会」では3つの項目に着目した研究・実践を重ねたことで子どもたちの学力が向上し，落ち着いた学校生活につながったことなどが報告されている。

山形県新庄市では、新庄市長期教育プラン「いのち輝く新庄もみの木教育プラン21」に基づく小中連携･一貫教育を平成18年度から組織的に整備し，小中一貫教育を市全体で推進している。この方針を受け，新庄中学校区では，下記のような小中連携の組織を作りながら，教員の乗り入れ授業や小中奉仕活動，小中合同あいさつ運動などの実践を組織的に行った。その成果として，小中間の共通理解が十分に図られ，不登校の数も大きく減少したことなどが報告されている。

＜新庄中学校区・小中一貫教育の主な組織＞

・会長（校長）　　・事務局（教頭）
・研究運営委員会
・研究部会
　ア，学び部会・・・学習指導を中心とした研究
　イ，生き方部会・・保健安全指導を中心とした研究
　ウ，かかわり部会・生徒指導を中心とした研究

山形県最上郡の大蔵中学校区や山形県新庄市の新庄中学校区の実践からは，地域を巻き込んだ小中連携を進めていることや連携を通して子ど

もたちや小中教員にいい変容が見られたことを成果として明らかにしている点は評価できる。ただ，両中学校区の実践は，栃木県宇都宮市の一条地域学校園の実践同様，子どもたちの実態把握からの分析がなく，家庭教育を担う保護者を巻き込んだ小中連携の取り組みが意識的に行われていない。

3　実践と結果（明らかになったこと）

(1) 中１生徒と小中教員対象のアンケート結果

先行研究の検討を踏まえ，児童生徒と教員を対象とした「中１ギャップと小中連携にかかわる実態を把握するためのアンケート」を行った。第一に，2013年６月中旬に筆者の勤務するＫ町内の４つの小学校とＫ中学校にて実施した。第二に，2013年10月下旬に山形市内Ｎ中学校にて実施した。結果は以下の通りである。

①中学１年生対象のアンケート結果

対象者　・筆者の勤務するＫ中学校（70人）
　　・山形市内Ｎ中学校（166人）

No	質問	回　答	K中学校	N中学校
①	中学校入学前の意識	どちらかというと楽しみ	３１人【46%】	７８人【47%】
		どちらかというと不安	３２人【49%】	５９人【36%】
②	中学校生活で楽しみだったこと（複数回答）	学習する内容	１８人	２４人
		友だち関係	５５人	１１２人
		部活動	５５人	１１８人
		学校行事	５０人	７１人
③	中学校生活で不安だったこと（複数回答）	学習する内容	４０人	１００人
		成績	５１人	１１０人
		友だち関係	１９人	４３人
		先輩との関係	４４人	６４人
④	現在の中学校生活は楽しいですか	楽しい	４７人【68%】	１０４人【63%】
		どちらかというと楽しい	１９人【27%】	５０人【30%】
		どちらかというと楽しくない	３人【４%】	１２人【７%】
		楽しくない	１人【１%】	０人【０%】
⑤	中学校生活が楽しいと感じている理由　1）	信頼できる友だちがいるから	２９人	６５人
		みんなとよく話ができるから	１６人	３０人
		部活動が楽しいから	１１人	２６人

中１対象のアンケートからは，次の３点が明らかになった。

第一に，中学入学前に学習面に不安を持っていた生徒が多い点である。それは，③の質問でＫ・Ｎ中学校ともに「学習する内容」「成績」を選んだ人数が多いことからわかる。

第二に，中学校入学前に先輩との関係に不安を持っていた生徒が多い点である。それは，③の質問で，Ｋ・Ｎ中学校ともに「先輩との関係」を選んだ人数が多いことからわかる。特にＫ中学校は44人（Ｋ中全体の63%）と高い割合を示した。

第三に，「中学校生活が楽しいと感じている理由」について，有効な友人関係や部活動の楽しさから，中学校生活が楽しいと感じている生徒が多いことである。それは，⑤の質問で，「信頼できる友だちがいるから」「みんなとよく話ができるから」「部活動が楽しいから」を選んだ人数が，Ｋ・Ｎ中学校ともに，他の項目よりも多かったことからわかる。

②小中学校教員対象のアンケート結果

対象者　・筆者の勤務するＫ町内の４小学校の教員（41人）
　　・筆者の勤務するＫ中学校の教員（16人）

No	質問	回　答	小学校	中学校
①	中１ギャップ克服のために小中連携は必要か	とても必要だと思う	６６%	２５%
		ある程度必要だと思う	３４%	６２%
		あまり必要だと思わない	０%	１３%
②	中１ギャップ克服に向けた小中連携の取り組みで重視すべき観点	学力の定着や互いの授業の工夫改善	１２%	７%
		生徒の豊かな人間性の育成	１４%	２１%
		生徒指導上の児童生徒の深い理解	１６%	３０%
		義務教育９年間を見通した系統的な指導	２６%	１４%
③	勤務校の小中連携の充実度	充実している	０%	１３%
		どちらかというと充実している	２９%	５０%
		どちらかというと充実していない	６６%	３１%

		充実していない	0%	0%
		わからない	5%	6%
④	現勤務校の小中連携が充実していない理由 2)	各学校での取り組みの様子や情報が把握できてない	19%	0%
		小中で共に育てたい力や連携の意義が共通理解できていない	33%	17%
		密接な小中の情報交換が行われていない	11%	32%
⑤	連携している各学校の取り組みについて知りたい情報	児童生徒の学力の実態	10%	6%
		連携相手校種の教員の学習指導の方法	28%	6%
		児童生徒の生徒指導についての実態	57%	57%
		児童生徒の人間関係	0%	19%

小中教員対象のアンケートからは，小中の「共通する点」と「違いが見られる点」について，次の点が明らかになった。「共通する点」としては，「小中連携は必要である」と感じている小中教員が多いことである。それは，①の質問で，小中とも「とても必要だと思う」「ある程度必要だと思う」を合わせた割合が高いことからわかる。「違いが見られる点」としては，「小中連携で重視すべき観点の違い」「小中連携の充実度に対する意識の違い」「小中連携が充実していないとする理由の違い」「連携している各学校の取り組みについて知りたい情報の違い」の4点の違いが明らかになった。

第一の「小中連携で重視すべき観点」については，②の質問で，小学校教員は「義務教育9年間を見通した系統的な指導」の割合が高いのに対し，中学校教員は「生徒指導上の児童生徒の深い理解」と「生徒の豊かな人間性の育成」の割合が高いことがわかった。

第二の「小中連携の充実度に対する意識の違い」については，③の質問で，小学校教員は「どちらかというと充実していない」が66%で最も高い割合なのに対して，中学校教員は「どちらかというと充実している」が50%で最も高い割合であることがわかった。

第三の「小中連携が充実していないとする理由の違い」については，④の質問で，小学校教員は「小中で共に育てたい力や小中連携の意義が共通理解できていない」が33%で最も高い割合なのに対して，中学校教員は「密接な小中の情報交換が行われていない」が32%で最も高い割合であることがわかった。

第四の「連携している各学校の取り組みについて知りたい情報の違い」については，⑤の質問で，小中教員とも「児童生徒の生徒指導についての実態」の割合はそれぞれ高いが，その他小学校教員は「中学校教員の学習指導の方法」の割合が高いのに対し，中学校教員は「児童生徒の人間関係」の割合が高いことがわかった。

以上のアンケート結果から，小中連携プログラム作成上の課題として，次の2点が指摘できる。

第一として，小学生の「中学校の学習面への不安」を軽減することである。第二に，小学生の「中学校の先輩との関係への不安」を軽減することである。小学生が抱いている「中学校への学習面への不安」と「中学校の先輩との関係への不安」の原因を探るため，アンケート実施後に中学1年生に追インタビューをした。

その結果，第一の「中学校の学習面への不安」の原因として，「中学校の学習内容がよくわからず，中学校の勉強はとても難しいのだろうと思っていた。」「思うような成績がとれるかが不安だった。」などの意見が挙げられた。そこで，中学校教員が小学生へ授業を行うことにより，中学校の学習内容を理解させ，学習面への不安を軽減させるための取り組みとして「小中授業交流」を行った。

第二の「中学校の先輩との関係への不安」の原因として，「部活などで，先輩とどのように接したらいいのか不安だった。」「中学校には怖い先輩がいるのではと思っていた。」などの意見が挙げられた。そこで，小中学生の異年齢交流を行うことにより，中学生への親しみを感じ，中学校の先輩との関係への不安を軽減させるための取り組みとして「地区中総体壮行式への小学6年生の参加」と「小学校運動会への中学生のお手伝い」を行った。

(2) K中学校区での小中連携プログラムの実践

①小中授業交流について

ア）社会科授業交流

アンケート結果の考察を受けて，平成25年6月18日，K町内のK小学校6年1組の児童（20名）と6年2組の児童（21名）を対象とした社会科の小中授業交流を実施した。ねらいは，授業交流を通して中学校の学習面における児童の不安を

軽減させることである。学習内容は「お弁当作りから食料について考える」の単元で，中学校2年地理の単元「日本の農林水産業」と関連させながら筆者が自作した教材を活用した。活動内容は，国内産と外国産の食材から，4 人グループでの活動を通して消費者にとって魅力的な弁当を作り，プレゼンを行うものである。

当日の状況として，6 年生の児童たちは値段や安全性，コンセプト，消費者が求めていることなど，お弁当を売る経営者の視点から真剣に考え，工夫をこらしたお弁当を作ってプレゼンすることができた。以下は，授業交流に参加した小学6年生の感想の一部である。(下線部:筆者)

(a)国内産と外国産の食材から自分が好きな食材を選んでお弁当作りをしたのはとても楽しかったです。中学校の勉強は小学校よりも大変そうだなと思っていましたが，中学校の先生の授業を受けて，小学校の内容ともつながっているし，中学校の勉強も楽しそうだなと思いました。
(b)中学校の社会はとても難しいと思っていましたが，答えがないという所がとてもおもしろいと感じました。中学校の社会科が少しずつ楽しみになりました。無事に中学校に入学できるように，今の勉強をしっかりがんばりたいです。

(a)，(b)の記述から，中学校教員から小中の学習のつながりを意識した授業を受けたことにより，子どもが授業を楽しみ，中学校の勉強への不安が期待へと変わっていったことがわかる。(b)の記述からは，さらに今の学習に真剣に取り組もうとしている意欲も感じられる。

児童の感想から，社会科の小中授業交流により，子どもたちの学習面への不安は軽減され，中学校の社会科の学習への期待を持たせることができたことが成果として明らかになった。

イ) 音楽科授業交流

平成25年12月17日，K町内のK小学校全校児童(230名)，K中学校1年生(71名)を対象とした音楽科の小中授業交流を実施した。小学生へのねらいは，中学校の学習面への不安を軽減させることである。中学生へのねらいは，小学生に先輩としての手本を示せた喜びや充実感を持たせることである。学習内容は，K中1年生がK小学校を訪問し，中学校の音楽科の学習内容を紹介しながら，合唱とリコーダー演奏を披露するものである。

当日の状況として，全校児童は真剣な表情で中学生の合唱やリコーダー演奏を聴くことができた。授業交流後にはK小の各先生方から，「きれいな歌声で歌っている態度が立派だった。」「これからも無理なく続けられそうないい交流だった。」などの感想をいただき，小学校教員も小中学生が意欲的に交流する姿から，この活動の有効性を認識したことがわかった。以下は，授業交流に参加した小学6年生の感想の一部である。(下線部:筆者)

【小学6年生】
(a)中学生の歌声の高音と低音がきれいですごいと思いました。アルトリコーダーの演奏もとても音がきれいでした。来年私も中学生なので，合唱やリコーダーをがんばりたいです。
(b)リコーダー演奏はすごく上手で，最後の学年合唱は，声の迫力がすごく，1年生全体の絆も感じられてすごく感動しました。今まで中学校ではどんな音楽の授業をするのかがよくわからなかったのですが，来年中学校に行ったら，今の中学 1 年生のようにきれいな声で歌えるようになりたいです。
【中学1年生】
(c)小学生に，今のベストの合唱を披露できて良かったです。K小はとてもなつかしく，6年の担任の先生ともお会いしてうれしかったです。
(d)今日は，K小の全校生徒の前で私たちの合唱を発表できてうれしかったです。中学生の私たちが一生懸命声を出して歌うことで，「歌うことってかっこいいんだ。」と思ってもらえたのではないかと思います。リコーダー演奏でも，来年から始まる新しい楽器の授業に期待を持ってもらったのではないでしょうか。小学6年生には，不安をあまり持たずに，期待を持って中学校に来てほしいなあと思います。

小学6年生の(a)，(b)の記述から，中学生の合唱やリコーダー演奏への賞賛や憧れ，中学校の音楽科の学習への期待を持ったことがわかる。司会役の中学生が，演奏の合間に中学校の音楽科の学習内容を紹介したことも，児童が学習内容についての理解を深め，学習面への不安の軽減と期待感につながったと考えられる。

中学1年生の(c)，(d)の記述からは，小学校への懐かしさや小学生の前で合唱やリコーダーを披露できた喜び，先輩としての手本を示せたという充実感を持ったことがわかる。さらに，(d)の記述からは，不安を持たず期待を持って中学校に

来てほしいという先輩としての思いも感じられる。

児童生徒の感想から，音楽科の小中授業交流により，小学生にとっては，中学校の音楽科の学習への不安が軽減され，期待感を持てたことが成果として明らかになった。中学生にとっては，小学生に先輩としての手本を示せた喜びや充実感を持てたことが成果として明らかになった。

②地区中総体壮行式への小学6年生の参加

平成25年6月12日，K町内の4小学校の6年児童全員（58名）とK中学校の全校生徒(171名)を対象とした「地区中総体への小学6年生の参加」を企画した。ねらいは，小中学生が激励を通した異年齢交流を行うことにより，小学生が中学校の先輩への親しみを持ち，地域の代表としてがんばろうとしている中学生を支えることである。活動内容は，金山中学校の地区中総体壮行式に参加し，各小学校代表が激励メッセージを述べた後，小学6年生児童全員で激励のエールを行うものである。

当日の状況として，小学6年生は，中学生の決意発表を行う姿や応援の迫力に驚きながら，先輩である中学生への応援を一生懸命行うことができた。中学生からは，小学生の応援に対して感謝の言葉を述べたり，大きな拍手で応える場面も見られた。以下は，地区中総体壮行式に参加した小学6年生の感想の一部である。（下線部:筆者）

（a）各部の中学生が自分の目標を持って練習していると聞き，さすが中学生だと思いました。私も中学校に入ったら，中学生の先輩たちを見習い，自分の目標をきちんと持って中学校の活動に取り組みたいと思います。

（b）小学校の壮行式と比べてみても，中学校の壮行式の方が，ピラミッドを作ったり，応援歌を歌ったりしていて迫力がすごいと思いました。自分たちが応援した時，中学生の先輩たちが応援への感謝の気持ちを示してくれたのでとてもうれしかったです。中総体では，1人1人の先輩方にがんばってきてほしいと思いました。

（a），（b）の記述から，中学生への憧れや大会での活躍を願う気持ち，中学校の部活動への期待を持ったことがわかる。その原因として，激励を通した異年齢交流を通して，小学生が中学生の先輩たちへの親しみを持ち，中学校の先輩との関係への不安が軽減していったためと考えられる。

児童の感想から，地区中総体壮行式への小学6年生の参加により，中学校の先輩たちへの親しみを持ち，先輩との関係への不安の軽減につながったことが成果として明らかになった。

③小学校運動会への中学生のお手伝い

平成25年5月26日，K町内のA小学校(33名)・N小学校（12名）・M小学校（40名）の3つの小学校の全児童，3つの小学校を母校に持つK中学校の生徒（54名）を対象とした「小学校運動会への中学生へのお手伝い」を実施した。ねらいは，小中学生が運動会を通した異年齢交流を行うことにより，小学生は中学生への親しみを持ち，中学生は母校に貢献する喜びや充実感を得ることである。活動内容は，中学生が母校の小学校の運動会に出向き，運営面のお手伝いや競技の一部に参加するものである。

当日の状況として，各小学校の運動会で小中学生は仲良くふれあい，中学生も意欲的にお手伝いや競技に参加していた。小学生にインタビューすると，「中学生のお兄ちゃん，お姉ちゃんたちが運動会に来てくれてうれしい。」という声が数多く聞かれた。以下は，各小学校の運動会に参加した中学生の感想の一部である。（下線部:筆者）

（a）久しぶりの小学校の運動会でとてもなつかしかったです。小学生の前走で走っている時，陣屋から「がんばって！」と言ってくれる子がいてとてもうれしかったです。僕は，「この小学校を卒業したんだ」と運動会に参加して改めて思い，同時にA小に対する誇りを感じました。

（b）N小の運動会ではしっかりと荷物運びや競技のお手伝いをすることができました。自分の育った学校で中学生として役立つことができてとてもうれしかったです。これからも，N小の行事がある時は，積極的に参加したいです。

（a），（b）の記述から，中学生は小学校への懐かしさや小学生から応援された嬉しさ，母校に貢献できた嬉しさなどを感じたことがわかる。そして，インタビューの声などから，小学生にとっても異年齢交流を行うことにより，中学生への親しみを持ち，中学校の先輩との関係への不安軽減につながっていったことが成果として明らかになった。

4　考察

(1)アンケート結果と小中連携プログラムの実践からの考察

アンケートによって明らかになった小中教員の，小中連携への向き合い方について考察する。

小学校教員の小中連携への向き合い方の特徴として，義務教育9年間を通してどのような子どもを育てるべきかを重視し，9 年間の系統性と見通しを持って指導にあたりたいと考えていること。そのため，中学生の生徒指導の実態や中学校教員の学習指導の方法についてもっと知りたいと感じていることがわかった。ただし，系統性を重視した小中連携の意義は小中間で共通理解されていないと考えており，そうしたことが「どちらかというと小中連携は充実していない」と感じている要因となっていることが明らかになった。

中学校教員の小中連携への向き合い方の特徴として，生徒指導上の児童生徒の深い理解や生徒の豊かな人間性の育成を重視し，その観点から小中連携の意義を考えていること。そのために，子どものこれまでの生徒指導の実態や人間関係についてもっと知りたいと感じていることが明らかになった。ただ，小中連携については「どちらかというと充実している」と感じてはいるが，生徒理解や生徒指導を充実させるため，より密接な情報交換がほしいと考えていることが明らかになった。

この違いが生じている原因として，次のことが指摘できる。単純に，義務教育9年間を前期(3年)，中期(3年)，後期(3年)と区分するとして，前期や中期を担当する小学校教員は，日常の指導が9年間の中でどのような位置づけなのかを理解しながら，見通しを持って指導にあたりたいと考えている。その一方，後期を担当する中学校教員は，現実に問題が起こった時に初めてその生徒の問題に即して小中9年間を捉え直そうと考えがちである。

しかし，自立した子どもを育成するためには，小中9年間を通して生きる力を系統的に育むことが重要である。そのため，小中教員同士が連携する機会と時間を十分に確保し，相互理解を図っていく必要がある。

小中連携プログラムの実践の成果として，次の2点が挙げられる。第一として，小中授業交流を通して，中学校の学習面への不安が軽減した児童がいたことである。学習面への不安は，中1ギャップの大きな要因となっていた。第二に，小中の行事交流を通して，小学生は中学生への親しみや憧れ，中学校生活への期待感を持てるようになったことである。一方，中学生は，母校に貢献できた充実感や自己有用感を持つことができたことである。

小中連携プログラムの実践の課題として，次の3点が挙げられる。第一として，この小中連携プログラムは，アンケート結果を基に筆者が計画を立てて単発的に行った実践であり，小中9年間の見通しを日常的に持ちながら組織的に行ったものではないことである。第二に、このプログラムの実践を通し，小中の児童生徒の連携は深まったものの、小中教員間の連携はあまり深まらなかったことである。その原因として，このプログラムが組織的に行われたものでなかったため，小中教員間の連携を深めるための機会や時間を十分に確保できなかったことがある。第三に，このプログラムは，小中学校の枠内にとどまった実践であり，保護者や地域住民と連携した実践ではなかったことである。

以上の課題に取り組むために，筆者の勤務するK町における小中連携教育のアクションプランを提案したい。

(2) 筆者の勤務するK町における小中連携教育アクションプランとその手だて

アクションプランのねらいは，次の3点である。

第一に，アンケート結果から明らかになった中学入学前に多くの子どもたちが抱える学習面と先輩との関係への不安の軽減を図る活動を組み込むことである。第二に，9 年間の見通しを日常的に持った組織的な小中連携体制を構築し，小中教員が共同で授業方法の研究を行い，小中教員の相互理解を図ることである。第三に，小中学校の枠内にとどまらず，保護者や地域住民を巻き込んだ小中連携の取り組みを行うことにより，地域や保護者に信頼される学校づくりを推進することである。

K町の小中連携教育組織は以下の通りである。

＜K町小中連携会議（仮称）の主な組織＞

・K町校長会

・小中連携推進委員会

（教頭、教務主任、小中連携担当、課題別研修会の各部長）

・課題別研究会（小中教員全員）

ア、学びづくり部会

イ、育ちづくり部会

・生活リズムづくり部会　・ソーシャルスキル部会

・キャリア交流部会

学びづくり部会では，「対話と協同の授業づくり」を小中共通の視点とした研究を日常的に行って小中教員相互の授業改善に努め，9 年後の子どものあるべき姿を見通した学習指導，家庭学習の

習慣づくりなどの研究実践を進めていく。育ちづくり部会では，研究内容により，以下の３つの小部会を構成して研究実践を進めていく。

a　生活リズムづくり部会

（9年間を見通した生活習慣づくり，生活アンケートやノーメディアデーの取り組み，食育など）

b　ソーシャルスキル部会

（生徒理解や学級集団作りに生かしたQ－Uの実施と活用の日常化，ソーシャルスキルの研究と実践，特別支援を要する子どもの情報交換など）

c　キャリア・交流部会

（児童生徒による小中交流活動の計画・実践，小中合同活動実施，地域行事への共同参加など）

保護者や地域住民の連携については，課題別研究会のａとｃの部会協議に参加してもらう。地域住民とは，学校評議員や町の民生委員である。具体的な活動として，生活リズムづくり，小中交流活動や地域行事で関わってもらう。

この小中連携教育アクションプランの実践を通して期待される効果として，次の２点があげられる。第一は、9 年間の見通しを日常的に持った小中連携が推進されることである。第二に，小中連携に対する地域や家庭の理解や協力が深まり、地域や保護者に信頼される学校づくりにつながることである。

5　到達点と課題

本研究による到達点を挙げる。

本研究の第一の目的は、「中１ギャップの実態や小中間の連携において何が課題となっているかを明らかにする」ことであった。これについては，次の２つの点が明らかになった。第一は，中１ギャップに関して，「学習面」と「先輩との関係」において不安を持っていた子どもの割合が高かったことである。第二に，小中間の連携に関して，小中教員の小中連携への向き合い方の違いである。

第二の目的の「中１ギャップを克服し，小中間の連携の課題を解決するためにどのようなプログラムが有効なのか」については，次の２つの点が明らかになった。第一に，児童の学習面への不安を軽減する取り組みとして，「小中授業交流」は有効だったことである。第二に，児童の中学校の先輩との関係への不安を軽減する取り組みとして「地区中総体への小学６年生の参加」や「小学校運動会への中学生のお手伝い」は有効だったことである。

この到達点を踏まえ，今後の課題をあげる。

本研究では，児童生徒と教員のアンケートから小中学校の段差の特徴を明らかにし，筆者の勤務するＫ中学校区での小中連携プログラムを実践した。そして，その実践の効果を検証しながら，さらに課題に取り組むために，筆者の勤務するＫ町の小中連携教育アクションプランを提案した。今後は，このアクションプランをＫ町の小中教員に提案し，具体的実践を積み重ねながら，さらにその効果を検証したい。

注

1）アンケートの質問④で，「楽しい」「どちらかというと楽しい」を回答したＫ中 66 人、Ｎ中 154 人の生徒の中の人数

2）アンケートの質問③で，「どちらかというと充実していない」を回答した小学校教員人数（27 人），中学校教員人数（5 人）の中の割合

引用・参考文献

赤鹿弘和：『中１ギャップに関する研究 -小中連携一貫教育のあり方を中心にして-』，pp. 4-50，2009

ベネッセ教育総合研究所：『小中接続－子どもの学びを中学校へつなぐ』，2011

京都市総合教育センター：『小中連携教育の在り方』，pp. 4-19，2004

宮崎県西都市立妻南小学校：『中１ギャップの克服を目指した小中学校の連携のあり方』，pp. 7-13，2007

文部科学省：『平成 23 年度児童生徒の問題行動等の諸問題に関する調査』，2012
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1325751.htm （最終閲覧日 2014 年１月６日）

文部科学省：『小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理』，2012
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325893.htm
（最終閲覧日 2014 年１月６日）

山形県教育センター：『9 年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方』，pp. 73-75，2013

山形県最上郡大蔵村立大蔵小・中学校：『かがやく授業・かかわる子どもを目指して』，2011